

鎌倉出土の提子・銚子^{ひさげ ちょうし}

—環状金属製品の用途特定を受けて—

押木弘己（文化財課 調査担当者）

はじめに

筆者は昨年、佐助ヶ谷遺跡出土の環状鉄製品について資料紹介をおこない、既報告の類例も含め用途と部位の検討を試みた〔押木 2022b、以下「前稿」とする〕。その上で、最新の研究成果〔石橋 2022〕を参考にして、これら環状金属製品が提子本体と吊り手（つる＝弦・鉉）を連結させるために取り付ける吊り金具（前金具）であると特定した。また、石橋氏の論考により、博多や平泉など他の中世都市遺跡でも類例があることを知り〔石橋前掲一表5〕、博多では提子本体への装着例（完形品）があること、平泉では博多での出土を受けて提子の部品として再認識された上で考察が加えられている〔羽柴 2000〕ことを知った。前稿では、これら他地域の例を承知していない筆者の勉強不足を露呈したものの、鎌倉では過去に環状金属製品に特化した検討がおこなわれず、用途の特定もなされないままに来たことを考えれば、博多・平泉に比べて20年の周回遅れとはいえ、紹介できたことの意義は大きいと感じている。

本論では、前稿による提子部品の用途特定を踏まえ、中世都市鎌倉で使用された提子に加え、吊り手でなく柄付きタイプの「銚子」出土例にも目を配りながら、本来が酒器であったこれら製品の鎌倉での位置付けについて考察したい。

1. 中世遺跡出土の提子吊り金具—鎌倉と他地域の比較—

図1には、鎌倉を含む中世遺跡出土の提子吊り金具を図示した。鎌倉以外の出土例については石橋氏論考の表5から中世資料を抽出し、各調査報告書から実測図を引用した。鎌倉の事例については、現時点では悉皆的調査を経ていないため、今後の宿題としたい。

A～Eは鎌倉、ア～エは他地域での出土例である。鎌倉の事例について、資料個々の特徴や帰属年代は前稿で述べたので再論は避ける。前稿で得た結論として、A～Eの各例は報告書で「飾り金具」以上の言及がなく用途の特定がなされていなかったところ、博多・平泉など他の中世遺跡における類例により提子の吊り金具と判明したこと、そして今後は、これら他地域の出土例との比較・検討が必要になることを課題として述べた。まずは図1に掲載した各資料について、簡単な比較を試みたい。

鎌倉の5例のうち、A～Dが注口部側に取り付く前金具、Eが注口部の対辺に付く後金具である。Dについては小破片のため断定は避け、可能性の指摘にとどめる。

他地域の事例では、博多遺跡群84次調査のイー1・2が前金具・後金具とともに吊り手も装着されたままの完形資料で、京都市伏見区の稲荷山経塚出土の完形品とあわせて注目すべき資料である（図2参照）。こうした完形資料の存在により、吊り手のみの出土例も用途の特定

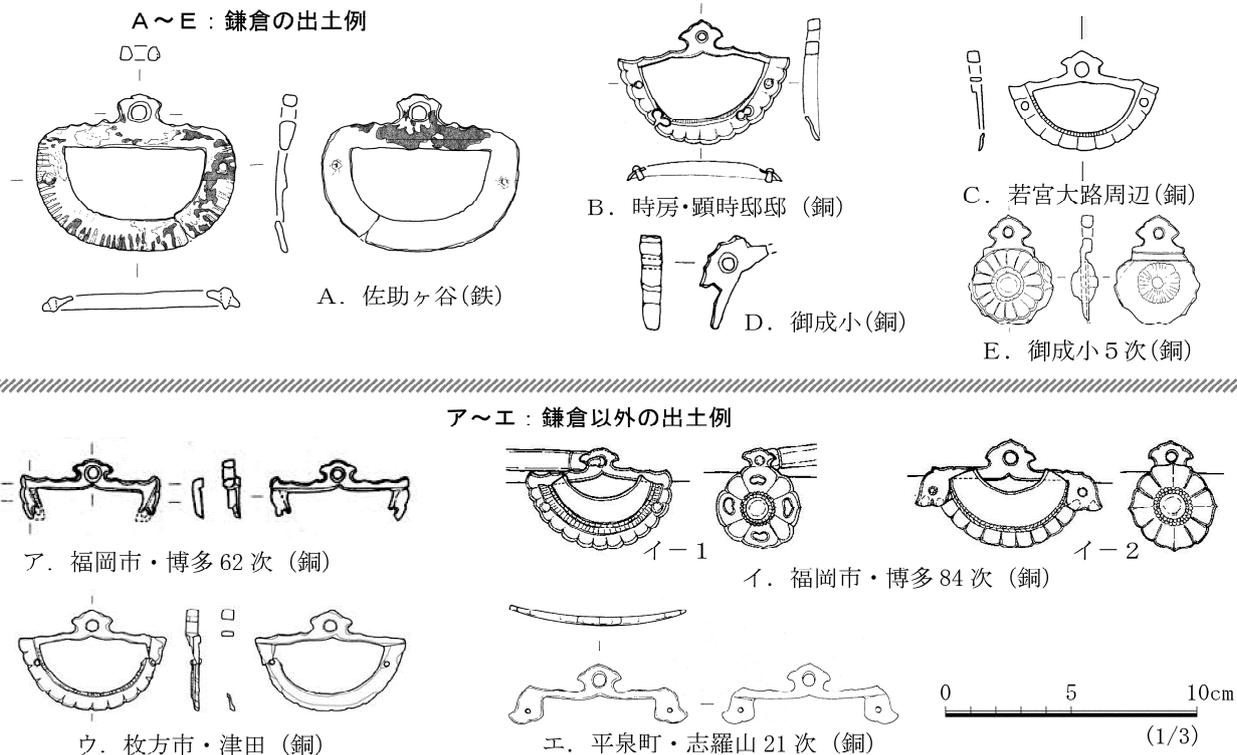


図1 提子の吊り金具（前金具・後金具）

に導かれることとなった。

図1には前・後金具あわせて12点を掲載したが、鉄製前金具Aを除く11例が銅製である。鉄・銅製とも基本的には鋳造品とみられるが、造形は銅製品の方が明らかに細かく優美である。鋳造・造形技術の難易度も関係していようし、製品としての価値も銅製の方が高かったことを示していよう。

銅製前金具には、B・C・ウのように半月形の環状を呈し注口部の付け根を囲み込むタイプと、ア・エ・図2-カのように注口部の上部を両サイドから挟み込むタイプが存在する。また、イ-2は上弦と下弦の花弁様装飾部が別部品となっており、より手の込んだ製作過程を必要としたことは想像に難くない。一方、環状タイプのCとウは形状・文様構成・サイズが酷似しており、鎌倉一畿内間における意匠・技術の系譜を考える上で興味深い比較材料となる。残念なことに、両資料とも出土層位・伴出遺物からは製作・使用年代を絞り込むことが難しい状況にあるため、現時点では見た目の近似性を指摘するにとどめたい。Bは遺構内の伴出遺物から、12世紀末～13世紀前葉まで遡らせ得る。

博多84次の2点は提子本体も銅製であることから、他の銅製吊り金具も銅製の本体に装着されていた可能性が高い。かたや、唯一の鉄製事例である前金具Aは、キザミ装飾をもつ表面および上弦付近の裏面には黒色の付着物が遺存している。正確な分析は行っていないが、肉眼観察では漆の可能性を考えている。提子本体も鉄製であったか、あるいは漆塗りの木製容器であった可能性も考え得る。銅製前金具の各例に比べ環状部内径＝注口部の付け根が大きかった

F. 鎌倉市・笹目 (銅)
14世紀後半～15世紀前半

イ-1～3. 福岡市・博多84次
12世紀後半以前

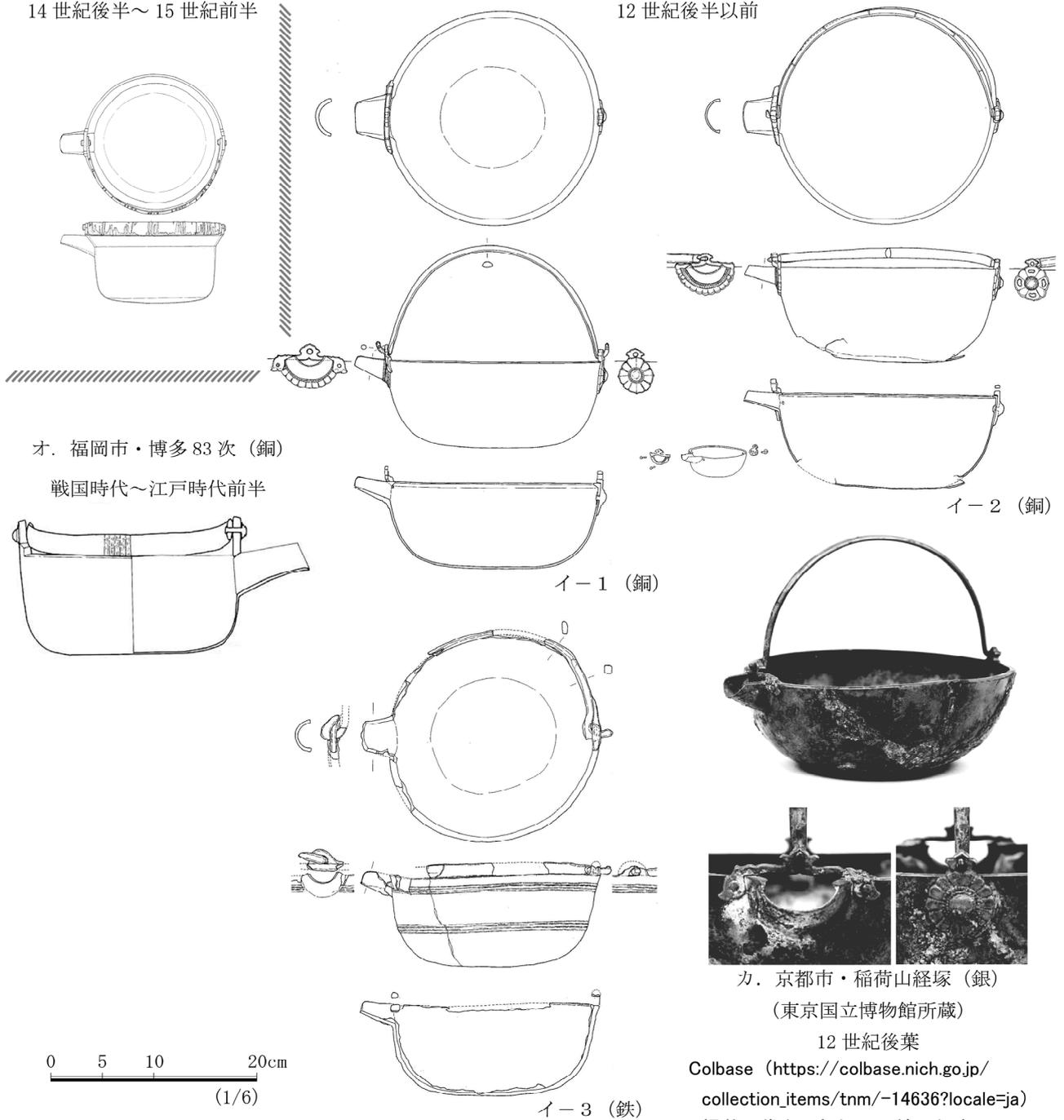


図2 提子の完形資料

状況がうかがえ、これに比例して提子の本体も大型であった可能性がある。13世紀中葉頃の遺物包含層中から出土している。

2. 完形の提子

図2には鎌倉および他の中世遺跡から出土した、提子の完形品を掲載した。いずれも金属製でイ-3は鉄製、カは銀製で、その他4例は銅製である。提子は、本体となる片口鍋と吊り手

からなり、両者を組み合わせるための吊り座（釣座）は本体と一体成形であるか、図1の各例のように、本体と別作りの部品を介在させる2つのタイプが存在する。鑄造の金属鍋を本体とする場合、吊り座を一体成形するには鑄型をより複雑な作りをする必要があるため、F・オ・イー3のごとく、装飾を極力省いた簡素な造形にせざるを得なかったようだ。小さな突起部を鑄型に設けると、鑄込み時の失敗も増えたであろうことも推察される。一方、別作りの吊り座ならば、より繊細な加飾も可能となるし、原型さえあれば、鑄型の製作も比較的容易であったと考えられる。他方、吊り金具は目釘で鍋本体に接合する構造上、一体鑄造品よりも耐久性が劣ることは必然である。鍋本体には鑄造や叩き出しによって1mm程度まで器壁を薄く仕上げた例もあり、わずかな衝撃で破損したケースも多かったかもしれない。そうした場合、吊り金具・吊り手を新たな本体に付け替えることで、再び利用に供することが可能となる。鎌倉では提子本体のみの出土例はなく（柄付きの銚子は除く）、破損品は再び鑄直されたケースが多かったことを示唆している。であれば、吊り手前金具の環状部内形や吊り手の長さに適合させる必要があるため、鍋本体は口径に加えて注口部基部の幅・高さや下弦の湾曲具合に至るまで、一定の規格が存在した可能性を考慮してもよいだろう。図2に掲げたイー1～3・オの各資料が、時期や素材を異にしながらも概ね同じサイズであることは、中世における金属製提子が伝統的に規格性の高い製品であったことを物語っていようか。また、Fやオといった中世後期～近世の所産品は鍋本体と吊り座を一体鑄造で成形している点で12世紀以前の資料と明白な違いがあり、底部～体部立ち上がりの屈曲が強い点や、口径に対し注口部の長さが大きい点などは、経時的变化の要素として指摘できるかもしれない。現時点では実測図化された事例も少ない（特に経塚の出土例の場合）ことから、今後、比較対象を追加しながら検討すべき課題である。

3. 鎌倉出土の提子関連資料

図3には、鎌倉で出土した提子部品や、柄付きの銚子を含む関連資料を掲げた。瀬戸窯産の柄付き片口（行平鍋）は銚子の一例とも見なせるが、出土例も多いため、除外した。

まず提子の部品として、吊り手3例を図示した。いずれも鍋などの弦（鉉）として報告されているが、提子の吊り手として限定が可能であろう。博搜すれば、事例の増加が見込まれる。3例ともに鑄銅製で、G-2には植物の繊維が巻かれていた痕跡が残る。完形の図2-Fにも、吊り手に薄く割いた竹材が巻かれていたというので、滑り止めなど実用を兼ねた装飾が施されていたのであろう。Hの表面には、陰刻の円形文が連続して施されている。

Iは小型の銅製提子で、銅板叩き出し成形の可能性が指摘される。図2で見た他の完形資料と比べ極端に小さいことから、報文では「一般の調理用や飲酒用ではなく、薬餌用と考えたい」と述べている。Jは鉄製提子の吊り座小片で、鍋本体との一体鑄造品である。Kは正式報告が未刊行の資料で、舶載陶器とされるものの詳細は不明である。舶載品であれば、提子の類例が列島外にあるのかを考えるためにも、より詳しい情報が欲しいところである。

L～Nは、柄付きの「銚子」に関する出土事例である。提子と銚子の違いについては定義が

曖昧なところもあるが、本稿では羽柴直人氏の定義 [羽柴 2000] に倣い、片口に長柄が付くものを銚子、片口に鉉（吊り手）が付くものを提子と呼称してきた（図4）。L・Nはともに銅製で、「長柄」とまでは言えないが、片口に直交方向の柄が付くタイプである。Mは鋳型の雌型で、植物繊維を含む粘土で成形されている。口縁部の正対する2ヶ所に注口部の張り出し

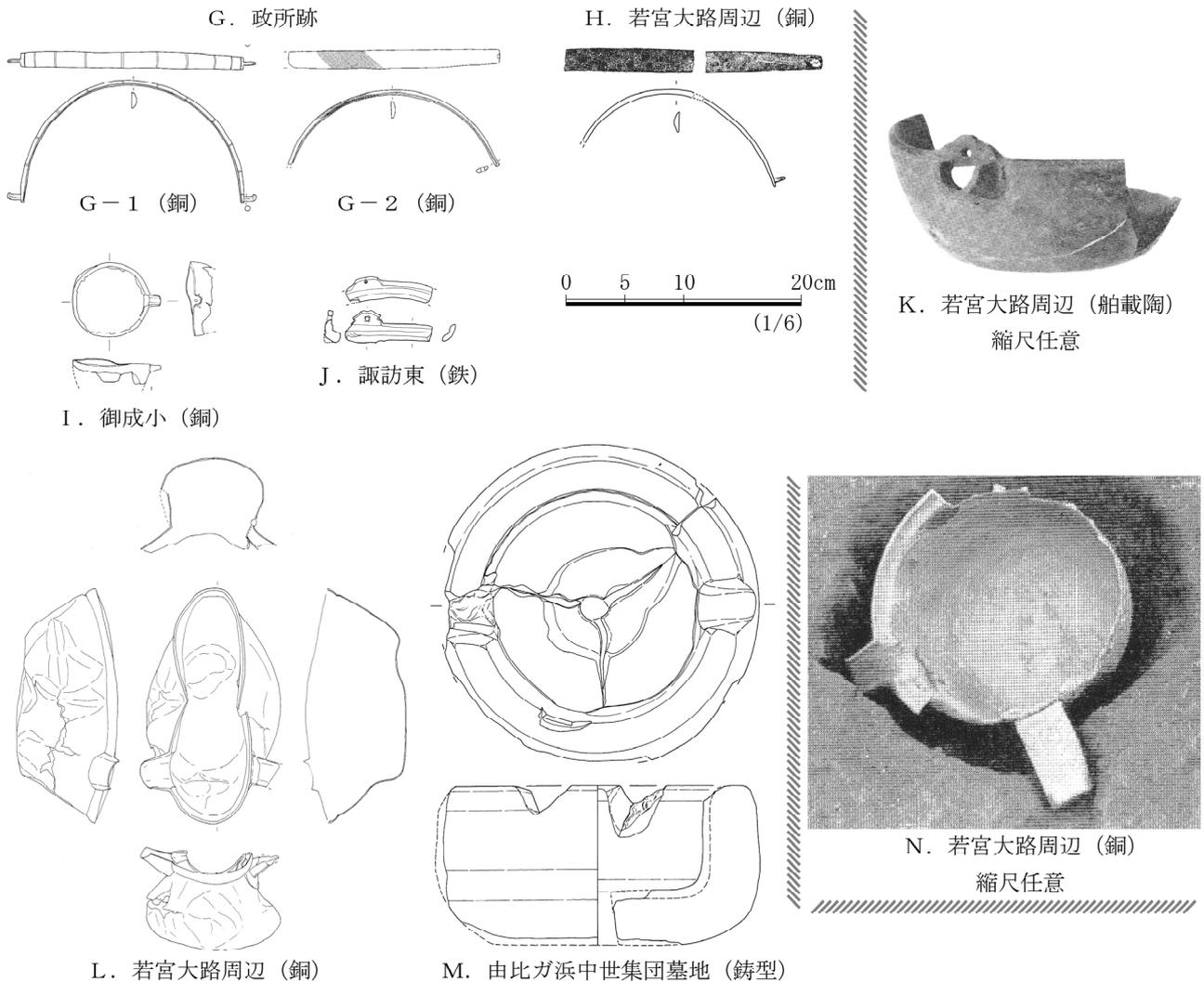


図3 鎌倉出土の提子・銚子関連資料

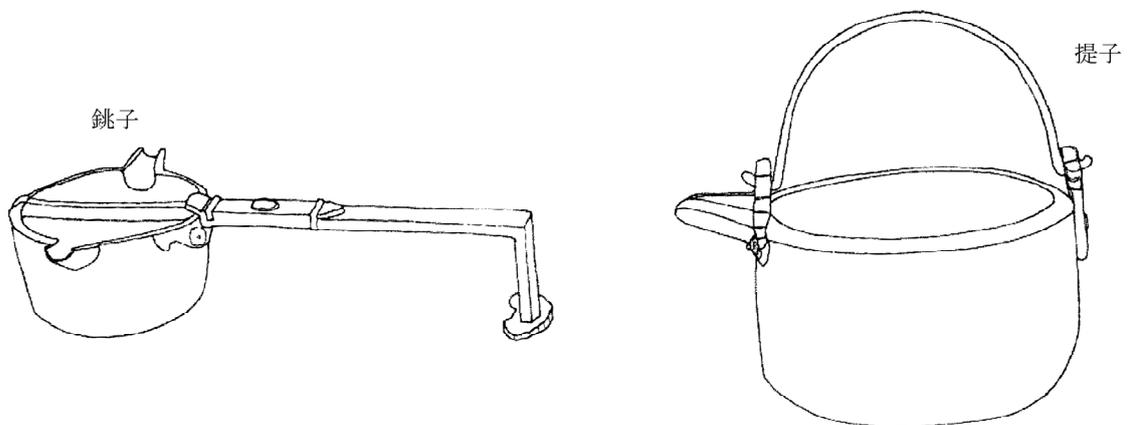


図4 提子と銚子 [羽柴 2000 より転載]

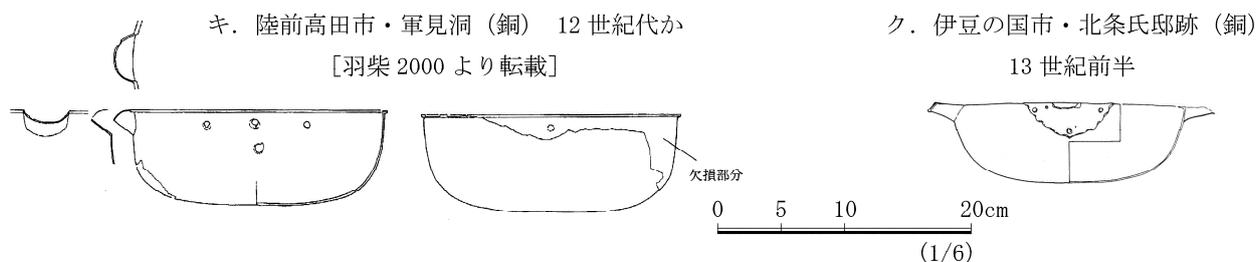


図5 他地域の銚子出土例

が付く。他に未報告の例として、本覚寺境内の発掘調査でも銚子の銚型が出土しているという(O)。出土状況の写真からは、Mと同様に両口タイプのように見える〔齋木 1989〕。

参考資料として、鎌倉以外の銚子出土例2点を図5に掲げた。キは羽柴直人氏によって紹介された資料で、土木工事にともなう不時発見の資料であり伴出遺物も不明であることから確実な年代は不明としながらも、博多84次出土の3例(図2-イ)と形態が近い点から、12世紀の奥州藤原氏時代に位置付けられている〔羽柴 2000〕。

クは伊豆北条氏の本貫地とされる御所之内遺跡第15次調査の5号井戸から出土し、青白磁合子身や、青磁の龍泉窯系劃花文碗・同安窯系櫛搔文皿、京都系手づくね製品を含むかわらけといった伴出遺物の様相により、13世紀前半という年代観が示されている。これら伴出遺物からは、13世紀前半でも、より古い時期に絞り込める可能性も指摘できる。資料を実見したところ、二つ口の鍋本体には底部から体部にかけて叩き出し時の凹凸(木槌痕)が確認でき、手に持った際の重量を殆ど感じないほどに薄く作られていた。把手は欠失していたが、両口に直交する側の口縁部外面に取り付け金具が遺存しており、その意匠には、図1で見た吊り金具との共通性がうかがえる。酒器としての提子は、酒杯にはではなく銚子に酒を注ぐことが本来の役割であったというから、共通のデザインをあしらわれた提子と銚子のセットが、酒宴の席で使用されたことも想起できる。

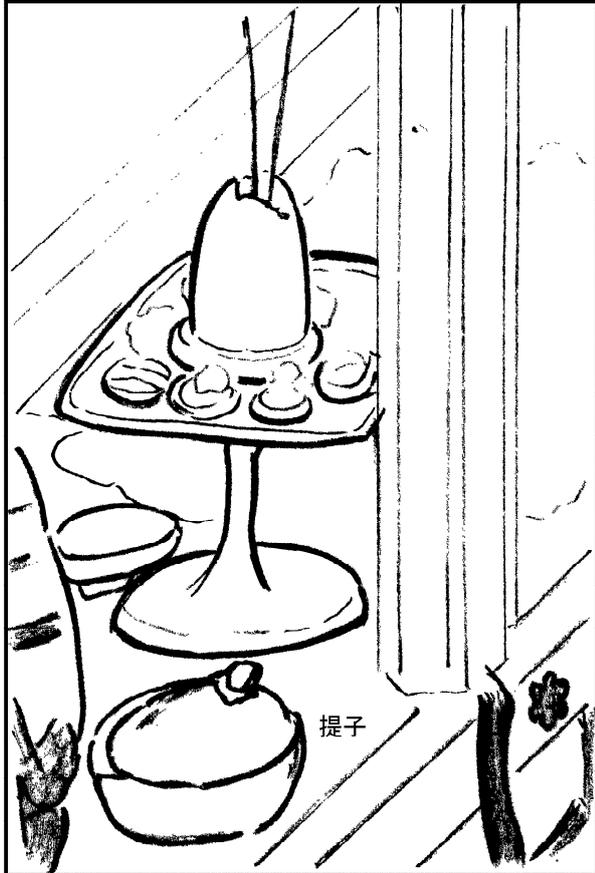
この他、本稿では割愛したが、鎌倉では漆塗り木製品や金属製品で注口部のみの出土事例が散見される。提子か銚子かの判別はできないが、前述のように吊り金具と組み合わせて提子に仕立てられた、漆塗り木製品の存在も想定できる。

おわりに―史料・絵巻物にみる提子・銚子―

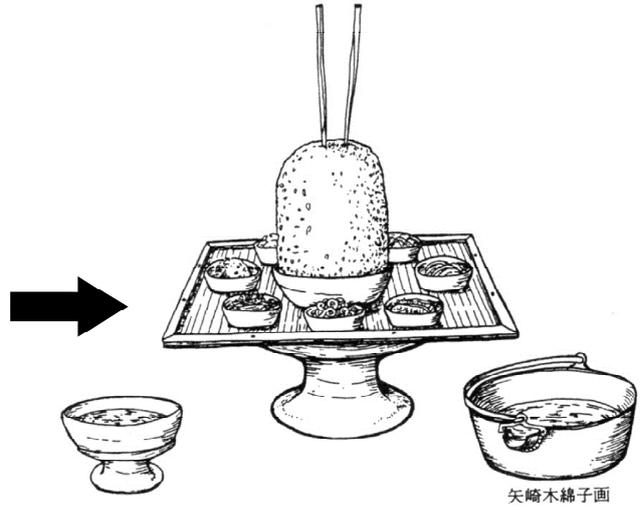
ここまで、中世鎌倉における提子・銚子の出土例を概観してきた。環状金属製品の用途判明を受けたのち、短期間で目に触れた関連資料を拾い集めたため、場当たりの論述となった。今後は、鎌倉の出土例について集成を進める中で、容量などの規格性や、前章までに予察的に述べた、型式や作り方の変遷について検討を重ねて行きたい。

2022年の鎌倉は、NHKの大河ドラマ『鎌倉殿の13人』で注目が集まった。劇中、酒宴や飲酒の場面が描かれることも度々あったが、筆者が記憶する限りでは、酒器として提子や銚子が登場したことは一度もなかったように思う。風俗考証の是非はともかく、中世鎌倉の出土品

信貴山縁起 (12世紀後半)

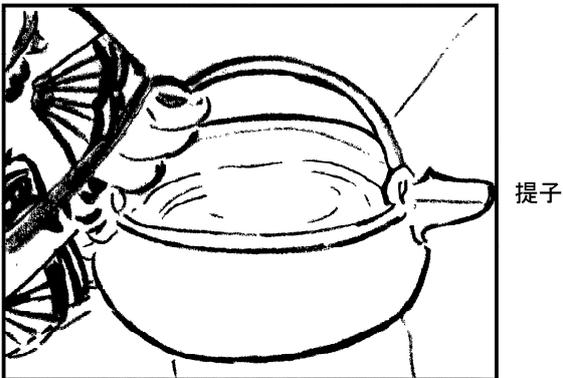


平泉・柳之御所の供膳具復元案 [羽柴 2001 より転載]



絵巻資料は筆者トレース、縮尺不同

絵師草紙 (14世紀前半)



慕帰絵詞 (14世紀中葉)

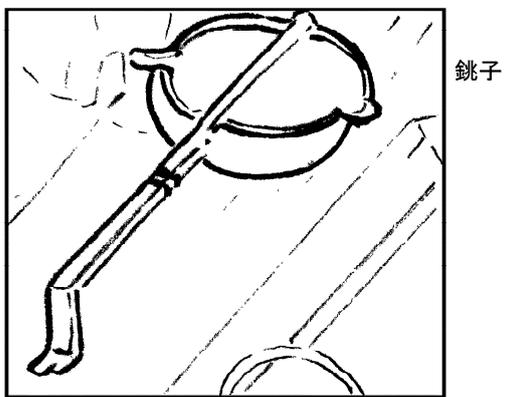
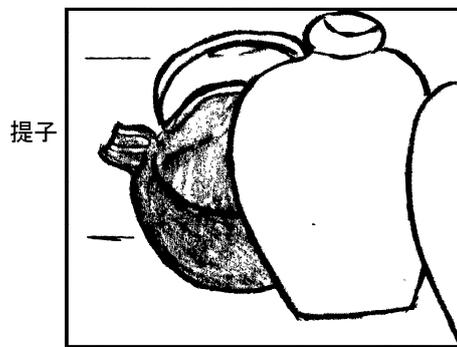


図6 中世の絵巻物における提子・銚子の描写

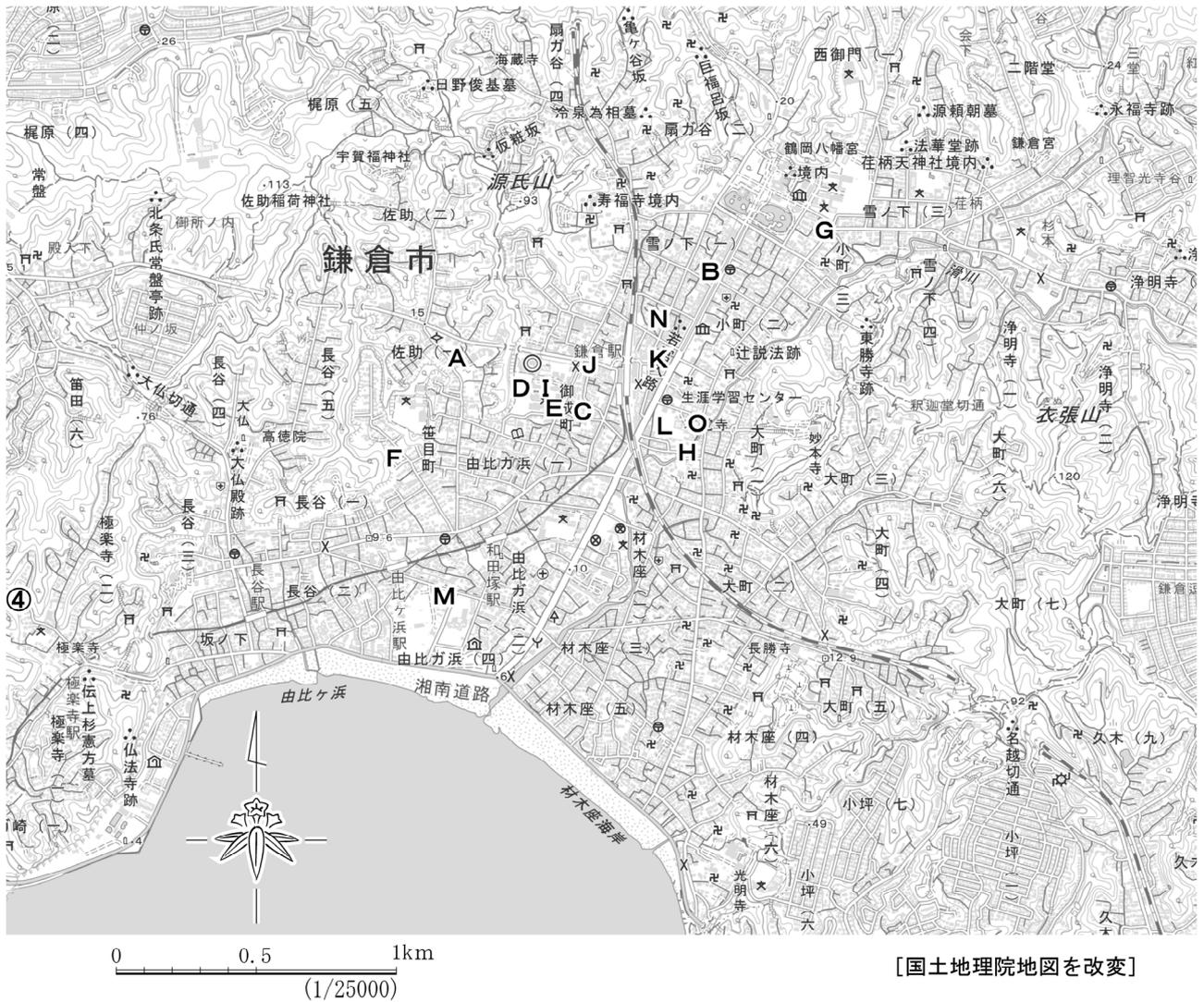


図7 鎌倉における提子・銚子関連資料分布図

の中で、酒を注ぐ容器としては青白磁梅瓶が出土点数も多く、存在感が強い。かたや、本稿で取り上げた提子・銚子は金属製や木製であるため、鋳直しや腐朽により地中に残りにくい事情を考慮せねばならず、考古資料のみから使用の実態に近付くことは難しい。

ただ、絵巻物や史料からは、中世の飲酒場面における提子・銚子が普遍性の高いアイテムであったことを読み取れ(図6)、個々の形状が出土品と非常によく似ていることに驚かされる。右上には絵画表現と出土品とを考証材料とした平泉の供膳具復元案[羽柴 2001]を掲げた。筆者自身、これまでは「土高坏」に対応する柱状高台土器に目が向きがちであったが、改めて見ると、酒器であろう提子も供膳具セットにしっかりと含み込まれていたことを再認識した。今後、鎌倉でも実際の出土事例を踏まえつつ、同様の考証作業を進める必要があるだろう。

北条重時が1237~1247年の間、子息長時宛てに記したとされる「六波羅殿御家訓」(六波羅相模守教子息口口状)には、以下の一文がある[小澤 2003より引用]。

一、酒ナンドアランニ、一提ナリトモー人ニテノムベカラズ(後略)。

少量の酒であっても一人で飲まず、他者に振舞うべき心得を述べた文だが、ここで酒の量を

表す語句として、「提」が使用されている点に注目したい。わずかな量であることを象徴的に示す表現であろうが、「提」＝提子が酒を入れる・注ぐ容器として一般的な用具であったことがうかがえて興味深い。図1-A・Bは13世紀前～中葉に位置付けられる事例であり、上記家訓と同時代の実物資料として評価できる。吊り手G-1も13世紀前葉のかわらけ溜まりから出土しており、博多・平泉の時代に後続する提子の例として、意匠の系譜などを考証するための好材料となり得よう。

現状では集成といえる段階まで資料調査が進んでいないため、分布図を示す意義は薄いですが、参考までに図7を掲げた。出土地点個々の性格については十分な検討を試みていないが、武家の屋地や政庁、およびその隣接地という、中世鎌倉ならではの混然とした分布傾向といえる。Fは唯一の完形品で、埋納遺構という現位置を保った状態での貴重な出土例だが、当地点は寺院の可能性が高いと推察されている。14世紀後半～15世紀前半という時期も鎌倉では希少例といえるが、日常使いの酒器・液体容器にとどまらない埋納行為での使用は、信仰・精神世界における意図を読み取る必要があり、にわかには言及に踏み込めない。博多84次イ-1～3は12世紀後半以前の埋納事例であり、12世紀後葉で九条兼実の造営と目されるカなど、埋納行為との関連も視野に入れた検討が必要となろう。伊勢市朝熊山経塚^{あさまやま}では12世紀中～後葉の銀・銅提子が出土しており、中世社会における提子は世俗的な酒席での彩りという性格に加え、信仰世界においても何らかの役割を担わされた。この点、陶磁器など他の器物と同様、時代を問わずに共通する普遍的な事象といえる。

以上、覚書に過ぎない雑文を縷々述べてきた。鎌倉における膨大な出土資料の中から特定の資料を探し出す作業は、なかなか大きな労力を要する。日々の発掘調査に従事する傍ら遅々として進まないもどかしさを抱えつつも、地道に集成の歩みを進めて行きたい。

本来であれば博多・平泉など他地域の事例も早くから知るべきところ、叶わなかったのは、ひとえに筆者の浅学による。加えて、先輩諸氏が築いてきた各地研究者との交流を継承できていない点も要因といえる。かつてのように鎌倉の発掘情報を積極的に発信できるよう、心掛けるを新たにしたい。

謝辞

伊豆の国市教育委員会の池谷初恵氏には、事例クの存在をご教示いただき、また実見の機会もいただいた。鎌倉時代初期の良好な土器・陶磁器の組成にともなう銅製銚子の希少な出土例で、提子・銚子による中世の飲酒文化を考察するにあたり、鎌倉にとっても貴重な考古資料である。心より感謝申し上げたい。

引用・参考文献

- 池谷初恵 2005 「V. 御所之内遺跡第 15 次調査」『葦山町埋蔵文化財調査報告Ⅱ』葦山町教育委員会（ク）
- 石橋茂登 2022 「提子鑿座金具について」『奈良文化財研究所紀要 2022』奈良文化財研究所
- 大河内 勉 1991a 『笹目遺跡発掘調査報告書』笹目遺跡発掘調査団（F）
- 大河内 勉 1991b 「若宮大路周辺遺跡群の調査」『鎌倉考古』No. 20 鎌倉考古学研究所（N）
- 大河内 勉 2001 ほか『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡—第 5 地点 1 次・2 次発掘調査—』
由比ヶ浜中世集団墓地発掘調査団（M）
- 大庭康時 1995 『博多 48—博多遺跡群第 62 次調査の概要—』福岡市教育委員会（ア）
- 大庭康時 1997 『博多 56—博多遺跡群第 84 次調査の概要—』福岡市教育委員会（イ-1~3）
- 大三輪龍彦ほか 1985 『諏訪東遺跡』（J）
- 小澤富雄 2003 『増補改訂 武家家訓・遺訓集成』ペリかん社
- 押木弘己 2021 「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 37（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会（H）
- 押木弘己 2022a 「佐助ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 38（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会（A）
- 押木弘己 2022b 「佐助ヶ谷遺跡出土の環状鉄製品と類例資料をめぐって」『かまくら考古』第 54 号
鎌倉考古学研究所
- 河野眞知郎 1990 『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会（D・I）
- 河野眞知郎ほか 1993 『今小路西遺跡（御成小学校内）第 5 次発掘調査概報』鎌倉市教育委員会（E）
- 齋木秀雄 1989 「街なかの鍛冶屋と鋳物師」『よみがえる中世 3—武士の都 鎌倉』平凡社（O）
- 境 雅仁ほか 2021 『若宮大路周辺遺跡群（No. 242）』イビソク（C）
- 菅原計二 1993 「IV 志羅山遺跡第 21 次発掘調査」『平泉遺跡群発掘調査報告書』平泉町教育委員会（エ）
- 杉山富雄 1997 『博多 54—博多遺跡群第 83 次調査の概要—』福岡市教育委員会（オ）
- 瀬田哲夫 1992 「1. 政所跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8』鎌倉市教育委員会（G-1・2）
- 手塚直樹ほか 1982 『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団
- 羽柴直人 2000 「平泉遺跡群の提子（ひさげ）について」『志羅山遺跡第 46・66・74 次発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（キ）
- 羽柴直人 2001 「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第 13 号 岩手考古学会
- 原 廣志ほか 1988 「北条時房・顕時邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』鎌倉市教育委員会（B）
- 本間元樹ほか 2010 『津田遺跡Ⅱ』大阪府文化財センター（ウ）
- 松尾宣方 1983 「29 小町一丁目 65 番 10~12 所在遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』鎌倉市教育委員会（K）
- 宮田 眞ほか 2006 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』博通（L）
- 山口正紀 2014 「中世都市鎌倉の木の利用と役割」『木の中世』考古学と中世史研究会
- 山澤義貴 2011 「第 4 章 第 5 節 朝熊山経塚」『伊勢市史』第 6 巻 考古編 伊勢市